たのしい りんかん がっこう

たのしいりんかんがっこう

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20107509

モ腐サイコ100, 霊幻総受け

後日談です。師匠総受けです。とある悪癖のある師匠です。良ければどうぞお付き合いください。倫理がアレです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

エロ有りVer.は何処かにあります

たのしいりんかんがっこう

「おー、晴れたな〜！」
将が景色の眩しさに目を細める。
初夏のまだ涼しいキャンプ日和に、被害者の会のメンバーと霊幻は味玉県の山奥に来ていた。
「川遊びするならライフジャケットとマリンシューズ忘れんなよ！あんま遠くに行くな、迷ったら飛んで帰ってくるんだぞ、マスコミは何とかするから！！野生動物には触るなよ！！虫除け忘れんな！！」
「「「「「はーい」」」」」
茂夫、芹沢、花沢、律、将が素直に返事する。
「過保護だねぇ」
いつもの男性に憑依したエクボが霊幻と肩を組んだ。
「あいつらなら何かあっても大丈夫だろ。粒揃いの能力者だぜ？」
「馬っ鹿、超能力者でもパニクったら上手く能力使えない場合もあんだろうが。気をつけなきゃいけないポイントは普通のガキとおんなじだよ」
「おー流石保護者歴長いだけあんなー。感心するわ」
「ヨシフもちゃんとあいつら見ててくれよ？モブはともかく、他の子は結構ためらいなく能力使おうとするからな」
「へーへー」
「鈴木さんも」
「ん！？あ、ああ……」
統一郎は荷物を抱え直した。
「いやコイツには期待すんなよ。まともに子供の監督したこと無いからな」
「そう？まあエクボとヨシフと俺が見てれば大丈夫か……最上さん……は、好きにしててくれ」
「私はいいのかね？」
「対価を準備してないから」
「ほう、感心だな。そう、悪霊への対処はそれでいい。……まあ私

も見物がてら注意はしておくさ」
「ありがとな。……ヨシフ、エクボ、これ、全員の緊急連絡先をまとめた紙が入ってるんだけど、」
アウトドアスタイルの霊幻の胸元から出て来たお守りにエクボはぎょっとする。
「それ最上が作ったお守りじゃねぇか！！なんてもの持ってやがる！！あっぶねぇ！！」
「俺も仕事以外で使うのは申し訳ないなって思うんだけど、モブや芹沢が持って行けってうるさくて……とにかく、俺の意識がない時に何かあったら、エクボかヨシフが連絡頼むな」
「それはいいけどよぉ……」
エクボは霊幻からあからさまに距離を取った。
「札より威力は落ちるが、充分キミを守るはずだ。私としてはもっと日常的に持ち歩いて欲しいんだがね」
「いや、勿体なくて……」
「ふふ、嬉しいことを言ってくれる」
微笑む最上にヨシフは気だるげに口を開く。
「というか、無能力者のセンセイの探知って至難の業だけど、アンタの霊力を込めたお守りとか持ち歩いてたら簡単に居場所が分かるようになるんじゃねぇか？」
「……」
じろ、と胡乱げな目を向ける霊幻の視線から、ふい、と最上は顔を逸らした。

「なあなあ！薪割りしようぜ！！」
将が声を掛けると、わらわらと若者が集まっていく。
「へえ、このキャンプ場色々できるんだね」
律が貸し出された手斧で薪割りに挑戦する将を覗き込む。
「よ……っ、と。あれ？意外と難しいな」
斧は木の真ん中で止まってしまった。
「手ェ痛くなってきた。誰か代わって」
斧を抜こうと四苦八苦していた将が根を上げたので、茂夫が代わる。

「ホントだ……思ってたよりも硬いや。ふんぬぬぬぬ……！！」
「何やってるんだ……超能力で取ればいいだろう」
統一郎から呆れた声が落ちる。
「あっ親父、力使うなよ！？素手でやるのに意味があるんだからな！！」
「む……」
統一郎がかざそうとした手を下ろす。
「貸せ」
奮闘する茂夫からヨシフはひょいと斧と薪を取り上げ、振り下ろしてぱかんと割った。
「薪割りはコツがあんだよ」
ヒュン、と手斧を回してヨシフは握り直す。
「包丁みたいに切ろうとしちゃダメだ。まず斧に木を噛ませて……」
切り株の上に置いた薪の上部に、スコンとヨシフは斧を食い込ませる。
「斧の重さを使って振り下ろす。切るんじゃなくて割るんだよ」
ヒュ、と振り下ろした斧は薪を真っ二つにした。
「「「「おお〜」」」」
茂夫、律、将、花沢から歓声が上がった。
「ほれ、やってみろ」
くるりと手斧を回して刃の根本を掴み、ヨシフは茂夫に差し出した。
「えいっ！……あれ？簡単そうに見えたのに……」
また途中で斧が止まった。
「まー後は慣れだな。頑張れ」
立ち去ろうとしたヨシフに影がさす。
「よし、その薪割り、この霊幻新隆が引き受けた！！」
「師匠、やりたくなっちゃったんですね……」
苦笑しながら茂夫が手斧を霊幻に渡す。
「こうだろ？よ、っと」
ぱかん、と霊幻が薪を割る。
「えっすごい」

「お前本当に器用貧乏だよなあ」
「ふふんそうだろ！……いや待て器用貧乏は悪口じゃないか？」
「僕もやってみたいです」
霊幻は律に手斧を渡す。
「それっ！……あれ？割れない……」
「あー、もっとこっち持って。手首じゃなくて肘から振り下ろす感じで」
霊幻がやいのやいのと言い始めたのを見て、今度こそヨシフはその場を任せて他のメンバーの様子を見に行く。

「なんだこいつ鮎の掴み取りめっちゃ上手ぇ」
「へへ、そうかな」
エクボと芹沢は川に行って鮎の掴み取りをしてきたらしい。
「おー、じゃあモツ抜いといてくれ」
「えっ、鮎のキモうめーだろーが」
「若いやつらは食べ慣れて無いから多分食えねーよ」
「俺もグロくて無理だなぁ……どうやって取るんですか？」
ヨシフは荷物から割り箸を取り出す。
「こうやって、口から割り箸突っ込んで、捻って……よっ、と」
ずぼ、とキモを取り出す手際に芹沢が感心した声を上げた。
「俺もやってみよう。……あ、千切れちゃった」
「うわああ口に手ェ突っ込んで掻き出すな！！グロいんだよ！！」
「ははっ」
「おーいヨシフー！」
ぎゃいぎゃいやる２人に笑っていたら、ヨシフは霊幻から呼ばれた。
「何だ」
「テント建てとこうと思ったら、説明書通りやっても上手く行かなくて……ヨシフこういうの出来たりする？」
「貸してみろ」
ヨシフは説明書と現物を何度か見比べる。
「このタイプは、この部品をしならせて……」
「おっ出来た！お前なんでもできるな〜」

「野営訓練受けてるだけだ。先生と同じでな、器用貧乏なんだよ」
苦笑するヨシフは次は薪割りが終わって火起こしに入った花沢たちから呼ばれる。
「あー、割ったばっかりの薪は湿ってるからすぐは使えねぇぞ。こっちに積んである乾いてるやつ使え」
「ヨシフさん、お米炊きたいんですけど」
「えええ、わざわざ飯盒炊飯すんのか？レンタカーに電源あるし、炊飯器でいいんじゃねぇの……」
「せっかくキャンプだし」
律と将に強請られてヨシフはため息を吐きながら飯盒炊飯の準備をする。
それを苦笑して見ながら霊幻は炊飯器でも米を炊きはじめた。どうせこの人数では飯盒の米だけでは足らないに決まっているのだ。
「ヨシフさんすげぇ頼りになる……いい旦那とか父親になりそう」
将の言葉にピクリと統一郎が反応する。
「そーかよ、ありがとよ」
「ヨシフさんさあ、結構モテるんじゃねえの？」
「まあな」
「うわー大人のよゆー」
「……本命がなびかねえんじゃ意味ないけどな」
苦笑してヨシフは着火剤の封を切ろうとする。
「あっ待ってヨシフさん！火起こししてみたいな」
花沢がキラキラした目でヨシフを見る。
「……原始的なやつか？それともマグネシウムスターターか？」
よいしょ、とヨシフは立ち上がってキャンプの貸し出し用品の棚を見に行く。原始的なまいぎり式の道具が置いてあった。
「マグネシウム……って何ですか？」
「スターターな。マグネシウムの塊だよ。ナイフで削って簡単に火が付けられる。水に濡れても大丈夫だし、軍で結構使われてるやつだな」
「へぇえ……悩むなぁ……」
「……両方やってみるか？」
本気で悩み始めた茂夫達にヨシフは両方の道具を手渡す。

芹沢や霊幻、最上も合流して覗き込み始めた。
「いいんですか！？」
「まあなんでもやってみりゃいい。全員一通り道具を見たら、俺に返せ。手本見せてやるから」
道具が右から左に渡され、ヨシフの元に返ってくる。
「まずまいぎり式な。お前らポケットから綿埃出せ。……いや多いな！？こんだけでいい」
ヨシフは備え付けの新聞紙をこよりにして準備し、地面に座ってまいぎりを板に噛ませる。
「板にほくち……綿埃を噛ませて、一定のテンポで板を押す。火が付いたら、新聞紙に移して、ぐるぐるぶん回すと……ほれ」
メラメラと燃え始めた新聞紙に若者たちは感嘆の声を上げた。
「マグネシウムスターターは……もっと簡単だ」
ヨシフはポケットから銀色の金属片と十特ナイフを取り出す。
「この金属をほくちに向かってナイフで削ってためて、この黒い部分をナイフで軽く削ると……結構大きな火種になる。これをそのまま薪に入れてもいいし、新聞紙に移してもいい。ほら、これもやってみろ」
ヨシフは金属片を茂夫に投げて渡す。
「うわっこれ結構力いる……！！」
「こっちも思ったより上手くいかない……！！」
「できた！！」
苦労する若人たちの中で、誇らしそうに霊幻が火種を掲げている。
「おー本当に器用だな、センセ。あんたは何処でも生き延びそうだ……そういやエクボは何してんだ？」
「車で炊飯器見ててくれてる」
「ちょっと様子見てくるわ。火は霊幻、頼んだぜ」
「まかせとけ」
ヨシフは駐車場のハイエースを見に行く。そこではエクボが運転席で途中のコンビニで買った新聞を読んでいた。
「調子はどうだ？」
「米はまだ炊けてねぇぞ。……お前さん休まなくて大丈夫か？朝から運転してずっと動いてるだろ」

「お気遣いどうも。まだどうもねぇよ」
「ならいいがな。……ほらガキどもが呼んでんぞ」
キャンプ場からヨシフを呼ぶ声がする。
「へーへーへーなんだよ。……あー、こっからは根気だからな。ひたすらウチワであおげ。……ほらへばんな頑張れ！」
「ヨシフさん鬼教官〜！」
「いいからほら手ェ動かせ。火ィ消えんぞ。……俺ぁ次からは着火剤とライターをおすすめするね」
「今からでも……」
「あぶねえから絶対に入れんなよ。火ィ付いたらもう足せないからな」
結局根を上げた若者たちに代わり、ヨシフが火を大きくした。
「火ィ付いたぞ。魚持ってこい、焼くから」
「ヨシフー、野菜切るからナイフ貸して〜？」
「……包丁使えや。持ってきてただろ」
「キャンプ！って感じするじゃん」
「まあいいけど……気ぃ付けろよ。包丁より使い勝手悪いからな。おーい、誰かナイフ霊幻に渡してくれ」
網の上に鮎、タマネギ、キャベツにカボチャが並び始める。
「誰か火頼むわ。飯盒炊飯見てくる」
そうして昼ご飯を済ませた一行は、一旦火を消してキャンプ場併設のアスレチック場に向かった。

※

「霊幻お前なんであんなに張り切ったんだよ。明日絶対筋肉痛だぞ」
夜。バーベキューを囲みながらがやがやと皆で話している。
エクボがアスレチックではしゃぎすぎた霊幻を心配していた。
「いや『いける！』って思ったんだよ……」
「ハタチそこそこのやつらと現役警察官と張り合うなよ……そんなだから水に落ちるんだぞ」
「まだこの時期は水つめてーわ……」

「こんな馬鹿馬鹿しい事で風邪引かないでくださいね」
律が肉を育てながら呆れた声をかけた。
「か、影山くん大丈夫？今日は最上さんだいぶ食べてるけど……」
花沢が茂夫を覗き込む。
「キツくなってきた……最上さん、そろそろごちそうさましてもいいですか？」
「む！？すまんね、珍しいものが多くて……このタンをトリュフ塩で食べて終わりにしていいか？」
「そうしてください」
キャンプテーブルにはワサビ塩や梅塩、各種バーベキューのソースや焼き肉のタレなど主に花沢が持ち込んだ調味料が並んでいる。皆わいわいと一通り試して楽しんでいた。
「おい霊幻大丈夫か？さっきから船漕いでるが」
「ん……腹いっぱいで酒も入って眠くなってきたわ……悪いけどあと任せていい？」
チラッと霊幻は腕を組んでうたた寝している統一郎を見る。
「エクボとヨシフと……あと鈴木さんにも起きたら監督よろしく言っといてくれ」
「師匠、いい加減子供扱いやめてくださいよ」
「まだまだガキだよお前らは……ふぁあお休み〜」
ゴソゴソと霊幻は１人用テントに入っていく。『何が悲しくて自分に欲情すると分かってる奴らと寝なきゃならねえんだ』と言ってヨシフに組み立ててもらったものである。
「「「「「「「「……」」」」」」」」
しゅる、ぱさ、と霊幻がテントの中で寝巻きに着替えている音が気まずくて、思わず残りのメンバーは黙ってしまう。
「あ、ねえねえ、見てよ。師匠が水に落ちた瞬間。たまたま撮れたんだよねぇ」
ぱちぱちと火がはぜる音を遮って、茂夫がスマホを見せる。
「おーいいじゃん！ウケるww後でLINEで送ってよ」
「うん、分かった」
将の言葉に微笑みながら、律が兄のスマホを受け取って写真をスライドしていく。

「あ、僕と鈴木がウチワでバーベキューグリル必死であおいでるやつある」
「え！？はずかしー！」
「２人とも見た事無いくらい真剣な顔してるから、おかしくて」
茂夫がくすくす笑う。
「あ、芹沢さんが鮎掴んでるやつだ」
「凄かったよね、ひょいひょい水あげしてたもんね」
「こいつはクマだ、クマ」
エクボに指差されて、ビールで顔を赤くした芹沢が皮肉と気付かず照れる。
「いやあ……」
「あ、車から降りた所だ。気付かなかったけど……最上さんがピースしてる」
「カメラを向けられたのでつい、な」
「やめてくださいよシュールな心霊写真……」
「あ」
シャッ、と律がスワイプして出てきた写真に茂夫は焦る。
「「「「「「「あっ」」」」」」」
それは半裸で必死にカメラのレンズを塞ごうとする霊幻の写真だった。
「マズい、それ消せって言われてたんだった……すっかり忘れてた。ごめん律、スマホ返して」
茂夫はスマホを受け取って写真を消す。
「……あのさぁ、律の兄貴ってどんな感じで霊幻さんとヤんの？」
チラッと統一郎が寝ているのを確認して将が口を開く。
「え！？」
「いやー俺さぁ、気がつくと俺ばっかり出してて、『気持ち良かったぞ♡』って霊幻さんに頭撫でられて終わるの多いんだよね……なんか霊幻さんに抱かせて貰ってる、って感じから先に行けなくて」
「……僕もそんなに変わらないよ。いっぱい好きって言って貰って舞い上がってる内に終わるっていうか……」
「……なんかさ、ヤる前はアレやってコレやって……って考えるんだけど、気が付くと腰振って終わってるんだよね……」

「律も？……ヨシフさんはどんな感じなんですか？」
「ん？んん……」
ヨシフはスキットルを傾けて言葉を濁す。
「俺もそう変わんねぇよ」
静かにそう言った。
「……僕はさ、『性処理』って感じがして結構嫌なんだよね……」
「「「わかる」」」
花沢がぽつりと漏らしたボヤきに茂夫と律と将が大きく頷いた。
「霊幻さん何でもやってくれるけど、『ここが気持ちいい』とか『どこをどうして欲しい』とか絶対言ってくれないじゃない？いや訊けば言ってくれるんだけど、すごく演技臭いというか、こっちの意思を汲んで合わせてくるというか……もっと甘えて欲しいんだよね。……最上さん凄い顔してるんですけど、僕、そんなに変な事言いました？」
「ん！？いや、その……キミたち本当に新隆くんに興奮するんだな、って驚いて……」
「「「「は！？」」」」
わたわたと最上が慌てる。
「その、キミたちみたいな若い子が男に興奮してるってのが……想像できなくてな。私の時代では衆道は壮年の修行者の嗜みだったのだよ。てっきり精神的な恋愛だけかと……気を悪くしないでくれたまえ」
「あー、まあ男色は女を抱き飽きた奴がハマるイメージはあったな……」
ワンカップを傾けながらエクボが同意する。
「今どきは生まれつきってやつも多いってのが分かってきたらしいがな、正直馴染みはしないよな……男を抱いたり抱かれたりは特殊って『常識』が中々抜けねぇよ」
「オッサンはこれだから……」
「は！？ショウこのやろ、それ言ったら霊幻もオッサンじゃねえか！」
「あの人はその『特殊』の体現者じゃないか。あの人は別だよ」
「花沢、あれは女も男もお構いなしなだけだ。あれは節操がないだ

けだ！」
「エクボ、師匠をヤリチンビッチみたいに言わないで」
「まごう事なきヤリチンビッチだが！？！？」
「霊幻さん女の人相手でも突っ込まれる方らしいぜ」
「鈴木はなんでそんなこと知ってるの」
「気になったから聞いた」
「また最上さんは凄い顔してるし……」
「女性が突っ込む……とは……？何を突っ込むんだ……？
指……？」
「あーもうペニバン使うんだよ！にせチンコ付けて男掘る趣味のやつがいるんだって！！」
「？？？？」
「いいからアンタも霊幻とのセックスの不満でもぶちまけとけ！」
「いや私は特に……」
「いいんだぜ見栄張らなくても。いつも余裕そうにしてて生意気だなとか思ったりすんだろ？」
「……基本霊力でなぶっているからな……生意気というよりはあられもなくて可愛いというか」
「「「「霊力でなぶる！？！？！？！？」」」」
若人が前のめりになる。
「いや、キミたちもやろうと思えばできるだろう？それだけ霊能力が強いんだから」
「僕たち超能力としてしか扱って無いんで……ちなみにどうやるんですか？」
「使い方は除霊とほぼ同じだ。いつもは指先にある霊力を、こう、ちょっと先に集めるんだ。そのまま性感帯をいじってやれば神経を直接触るから……脳にも同じ要領で触れるぞ。イキっぱなしにしてやったりするとすごく可愛い」
「へぇ〜、練習してみようかな……」
「えげつない事してんな……気ぃ付けろよ、思うよりも多く霊力消費するからな。楽しいからってやりまくるとガス欠起こすぞ。このテクに自信がない素人童貞のヘタレみたいに悪霊食って補給とか出来ねぇんだからな」

「誰がヘタレだ」
「自覚ねぇのか？」
「……ところで雑魚、そこまで言うならキミはさぞかしセックスが上手なんだろうね？」
「俺様を！雑魚って呼ぶんじゃねえ！！……お前らよりは楽しんでるとは思うぜ。体位とか工夫してるか？」
「「「「「たいい」」」」」
「いや初めて聞いたみたいな顔すんなＡＶぐらい見た事あんだろーがよ」
「いやでも……ＡＶってファンタジーじゃん？」
「そういう認識は大事だがな、参考になる部分もゼロじゃねぇんだよ。体位を変えると当たりどころが変わるからな。いいスパイスになるぜ。あとはピストンのリズムとか……」
「「「「「リズム」」」」」
「おいおいおい人間なんだからよ、ひたすら腰振るだけが能じゃねぇだろ？浅く２回深く１回とかが有名だが、もちろん個々人でツボは違うから、色々試した方がいい。チンコとの相性もあるからな」
「……なるほど……」
「あとは当たりバイブ探したりとか」
「「「「「当たりバイブ？」」」」」
「バイブは製品によって振動周期違うのは知ってるよな？」
「知らない」
「……高いマッサージ機タイプのバイブだと高周波から低周波まで色々試せるんだが、それでも当たらない時もあるんだよな。高いバイブなら当たるって訳でもないから、こればっかりは買って試してみないと駄目でな……。気持ちいい周波数は人によって違うから、金に余裕があるなら色々試した方がいいんだよ。バチっと当たると気絶しそうなくらい気持ち良くさせられるぞ」
「……ちなみに師匠の当たりバイブって……」
「まだ見つけれてねぇ」
「ふーん……バイトしよっかな」
将が呟きながらスプライトを喉に流す。

「……なんかムラムラしてきたな」
「ふぁっ！？」
ぽつりとエクボが呟いた言葉に芹沢が跳ねる。
「ハメられる穴がそこにあんのに、猥談して我慢してるの馬鹿らしくなってきた」
「「「「……」」」」
「なぁ」
焚き火の炎がエクボの笑顔をチラチラと照らす。
「霊幻マワさねぇ？」
ヨシフと最上を除いた全員が息を飲む。
「やり方教えてやんよ。もちろん超能力使わない方法な。……だぁいじょうぶだって！！アイツの事だからちょっと怒って終わりだって」
エクボはワンカップを置いて立ち上がる。キャンプテーブルのサバイバルナイフを無造作に掴んだ。
「で、でも……師匠もう寝てるし、お酒飲んでるし……」
「いいんだぜ？別に俺様１人でヤっても。そこで指咥えて見てろ」
ちーっ、と音を立ててエクボが霊幻が寝ているテントのチャックをゆっくり開ける。
律が無言で立ち上がった。
「そんなに飲んでて勃つの？」
「なめんな」
ごそごそとテントに入っていく２人に茂夫と花沢が迷いながらも続く。
「んー……」
将はチラッと統一郎を見て、寝ているのを確認してからテントに入った。
「……止めなくていいんですか」
芹沢がヨシフに訊く。
「あのレベルの連中とやり合うには戦力が足らねえんだよ。ここは霊幻に我慢して貰った方がいい。……アンタは行かなくていいのか？」
「うーん……だって、社長起きてるじゃないですか」

ビクッと統一郎が揺れた。
「おー、良く分かったな」
「護衛してた期間が長いですから、本当に寝てるかどうかは分かります。……流石に社長にアレの時の声聞かれたりするのは、ちょっと……」
「……将には寝ていたと言ってくれ」
目をつぶったまま統一郎がうめくように言った。
「もちろんですよ」
「最上、アンタはいいのか？」
「悪い方にエスカレートするようなら止めるが、まあなんだかんだ言ってエクボくんは霊幻くんにベタ惚れだからね。見ていなくても大丈夫だろう」
「そうじゃなくてだな」
「分かっているよ。ふふ、多分だがね、ココで大人しくしている方がいい事があるよ」
そう言って最上は、焚き火を線香花火のように弾けさせて遊び始めた。

※

翌朝。
仁王立ちする霊幻の前に、茂夫、律、エクボ、花沢、将が正座させられていた。
「俺、複数人はＮＧだって言ったよな？」
「はい……」
「コレれっきとしたレイプだぞ？分かってんのか？」
「すみませんでした……」
「おいなんでさっきからモブが謝ってんだよ、首謀者はお前だろうがエクボ！！」
「へーへーすみませんでした〜」
耳をほじりながら謝るエクボに、霊幻の額に青筋が浮かぶ。
「反省の色が見えないみたいなら突き出すか？今なら証拠も取れんだろ」

ヨシフが煙草を手に霊幻に話しかけた。
「……いや、流石に前科にするのは……エクボに関しては身体の人が無実の罪に問われるだけだし……」
「甘ぇなあ、先生。そんなんだから調子に乗らせるんだぜ」
「……分かってるよ……とにかく、２度とすんなよ！」
「「「「はい！」」」」
ホッとした若人たちの顔を見ながら霊幻は深いため息をついた。
「じゃ、夜のシフト組みなおすな」
「「「「「えっ」」」」」
霊幻は手帳を取り出し、容赦なく茂夫、エクボ、花沢、律、将の名前を消していく。
「お前ら昨日３回ずつやったんだから、３日はやらなくていいよな？」
「いやちょっ」「待ってくださいっ」「俺が悪かったって！」
「な？」
「「「はい……」」」
「エクボは５日分無しな」
「えっ、ちょっと待て、その日レストラン予約して……！」
「うるさい。１人でメシ食ってろ」
「く、くそっ……！」
エクボはぐぬぬと歯噛みした。
「霊幻、こんなにスケジュールに穴開けて大丈夫か？セックス依存症の発作出るだろ、これ」
「あー……まあ別に適当に男引っ掛ければいいだけだし」
「おいおいおい勘弁してくれよこれ以上能力者引っ掛けてくるつもりか？仕方ねーな、俺の回数増やせ。付き合ってやんよ」
「んー、そっか。芹沢と最上さんもいけそう？」
「いけます！」「いけるぞ」
ふわ、と最上は浮遊して霊幻の手帳を覗き込む。
「この日に入れて２日連続にしてくれ。せっかくだ、草津温泉でも行こう」
「おーいいな、最上さんとならシングル料金で行けるもんな」
「ん？私から誘ったんだ、料金は私が持つよ」

「え？」
戸惑う霊幻の手のひらに最上は小さな黒い巾着袋を乗せる。
「開けてごらん」
「ダ……ダイヤ！？」
巾着の中からゴロゴロと光り輝く宝石が出てきた。
「換金は頼んだよ。せっかくだ、１番いい旅館に泊まろうじゃないか」
「最上さんコレ……どこから……！？」
「ああ、死ぬ前に財産をダイヤや金に変えてあちこちに埋めたんだ。私の物だから気にしなくていい」
「すげーな宝探しできるじゃん」
「ふふ、もちろん丁寧に呪いをかけた箱の中に入ってるよ。解呪できるなら挑戦してみればいい」
「やっぱいいわ」
ダイヤを手に霊幻があわあわと血の気が引いた顔で戸惑っている。
「じゃあ先生、ココとココに俺を入れてくれよ。台湾行こうぜ」
「海外！？いやちょっと旅費が……」
「台湾ぐらいなら奢ってやるよ」
「えぇそんな……悪いから……」
「気にすんな」
最上とヨシフの行動に芹沢も焦る。
「じ、じゃあ霊幻さん！俺はここに入れてください！日帰りですけど、牧場行きましょう……！」
「牧場……！」
霊幻の目が輝く。
「あああ師匠〜、僕も一緒に行きたいです……！」
「うっさい反省してろ」
すがる茂夫に霊幻はすげなく言い落とす。

「「「「「もう２度としませんからあ〜ッ！！！！」」」」」

気持ちのいい青空に、情け無い声が響き渡った。

終わり